

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Impact of quality of life on future frailty status of rural Japanese community-dwelling older adults

(地域在住日本人高齢者における将来のフレイル状態に及ぼす QOL の影響)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 器官・代謝制御系

総合診療内科学（指導教授 新村健）

氏名 森 敬良

【背景と目的】フレイルとは、生理学的予備能の低下によるストレスに対する脆弱性から、容易に健康障害を招きやすい状態である。フレイルは可逆性を有するため、フレイルの改善・悪化に寄与する要因を解明し、早期段階で介入することが重要である。地域在住高齢者を対象としたコホート追跡研究において、フレイルの改善・悪化に寄与する要因としての quality of life (以下 QOL) の意義を明らかにすることを目的とした。

【方法】2016 年 9 月～2017 年 12 月に、兵庫県丹波篠山地域在住で 65 歳以上の自立した高齢者におけるコホート研究に参加した 840 名のうち、2018 年 9 月～2019 年 12 月の 2 年後の追跡調査に参加した 551 名を対象とした。臨床背景、身体・認知機能、身体活動量、栄養素摂取、WHOQOL-BREF (WHOQOL-26) による QOL、J-CHS 診断に基づくフレイル状態について評価した。初回と追跡調査時のフレイル状態を比較し、改善、不变、悪化の 3 群に分類した。QOL は、身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境領域の 4 領域と全体 QOL の 5 項目で評価した。各パラメータを 3 群間で比較し、フレイル状態の改善・悪化に寄与する QOL 項目を修正ポアソン回帰分析により解析した。

【結果】初回調査時の対象者年齢は中央値 72 歳(68–76)、男性 190 名、女性 361 名だった。改善群は 114 名、悪化群は 92 名であった。年齢、性別、併存疾患数、教育年数、1 日のたんぱく質摂取量、初回調査時のフレイル状態で調節すると、初回調査時のフレイル状態がフレイル改善の最も強い予測因子であった ($P<0.001$, RR 3.24, 95%CIs: 1.75–6.00)。QOL の身体的領域は、初回調査時のフレイルの状態とは独立して、フレイル状態の改善と有意に関連していた ($P=0.027$, RR 1.93, 95%CIs: 1.08–3.47)。一方、QOL のどの領域も、フレイル状態の悪化とは有意な関連を認めなかった。

【考察】本研究は、身体的領域の QOL スコアが将来のフレイル状態の改善に影響すること、高齢者において QOL の状態とフレイル状態とは双方向的に影響を与えあっていることを初めて明らかにした。フレイルの悪循環から脱却するためには、QOL を高く維持できるようなテラーメイドの介入法を考案していくことが必要と考察された。